

幸福度に影響を与える因子に関する研究

デザイン開発の指標抽出を目指して

Study on factors that affecting Well-being for design development

● 蘆澤雄亮／公益財団法人日本デザイン振興会、小野健太／千葉大学

Yusuke Ashizawa / Japan Institute of Design Promotion, Kenta Ono / Chiba University

● Keywords Well-being Indicators, Design Promotion, Happiness, Community Activities

1. はじめに

1.1) 幸福度指標に関する動向

現在、国の発達度合いを測る指標として国内総生産（GDP）が重要視されている。しかしながら 1990 年代以降、所得が増加したにも関わらず主観的幸福感が低いという「幸福のパラドックス」問題[*1]が提起されるようになり、GDP を超えた新たな指標としての「幸福度指標」が多くの国々で研究されるようになってきている。日本においても平成 22 年 12 月に内閣府において「幸福度に関する研究会」が発足し、幸福度指標試案として、3つの柱からなる体系図を作成した[*2]。

1.2) デザインとしての幸福度指標

デザインの本質は対象とするユーザの幸福度向上を目的に眼前にある問題点を総合的に解決する実践的方法論にあり、幸福度向上という観点で考えた場合、ミクロの視点による実践活動と考えることができる。ところが昨今の成熟した社会において、眼前にある問題点そのものを導き出すことが難しくなっている傾向にある。これに伴い「何をどのようにすることが幸福につながるのか？」という原点に立ち返り、幸福を構成する構造そのものに関する研究も行われ始めている。

2. 研究の目的

幸福度指標に関する論議および幸福の構造に関するデザイン研究の両者において共通する項目に「関係性」がある。フランス・ドゥ・ヴァールは動物行動学的見地においてもコミュニティ活動における関係性および共感性が幸福度向上に寄与していると述べている[*4]。本研究では特にこの点に着目し、デザイン開発の指標として、様々なコミュニティ活動が幸福度向上にどのように寄与するかを調査する。

3. 研究の方法

本研究ではプロセスを大きく 3つのフェーズに分け研究を行う。第 1 フェーズでは文献調査およびヒアリング調査を行い、仮説を導き出す。第 2 フェーズでは第 1 フェーズにより得られた仮説に基づき、予備アンケート調査を行い、幸福度指標の仮説修正を行う。その後、第 3 フェーズでは第 2 フェーズで得られた仮説に基づきアンケート調査を行うことにより仮説検証を行う。

4. 仮説構築

第 1 フェーズとして本研究に関心のある学生、社会人等 5 名によるワーキンググループを作り文献調査を行うとともに、幸福度に対して関連性が高いであろう項目に関してディスカッションを行い、仮説構築を行った。その結果、

- (1) コミュニティにおける関係性が幸福度に大きく寄与するのではないかと
- (2) 内閣府発表による経済社会状況・健康についても何らかの関係性があるのではないかと
- (3) 夢・希望のように何らかの目標を持ち得るかどうかが幸福度に対して大きく寄与するのではないかと

という仮説を導き出した。また、アンケート調査に関する特定の状態を持ち得る人間のみを対象とすることにより生じるバイアスが結果に対して影響するのではないかとという懸念も抽出された。

5. 予備アンケート調査

上記仮説に基づき、第 2 フェーズとして 20 代から 60 代の男女 524 名（各年代毎に男女別約 50 名ずつ）を対象に以下の項目で予備アンケート調査をインターネットで行った。

(1) 関係性に関する詳細項目

「同居中の家族」「別居中の家族」「職場の同僚」「恋人もしくは配偶者」「友人」「ご近所」との関係性

(2) 内閣府発表の軸に関する項目

「自身の健康状態」「家族の健康状態」「収入金額」「可処分所得金額」「収入に対する満足度」「生活困難度」

(3) 目標に関する項目

「夢・希望の有無およびその内容」「何かやりたいことの有無およびその内容」

(4) 「幸福」という言葉のバイアス調査項目

「不幸具合に関する項目」「幸福になる・ならないために重要だと思われる要素」

調査結果において、幸福度について内閣府調査（国民生活選好度調査）と比較した結果、有意差として判定できるほどの違いが見られず、ウェブアンケート調査によるバイアスの影響はさほど考慮しなくてもよいことが分かった。

関係性に関する項目では「関係性が良好でない」と回答し

たサンプル数が余りに少なく、統計上の傾向を導き出すには難しいと考えられたが、各関係性についてより「良い」と答えたものから順に点数化し、幸福度を「幸福である」「幸福でない」の二値に変換し、さらに点数化した値をもとに判別分析を行った結果、正準相関係数は 0.393 とあまり高い値ではなかったものの、線形で分類可能であることが分かった。

目標に関する項目においては、回答が二値であったため、ノンパラメトリック検定を行いグループ間に差があるか検証を行った。その結果、「夢・希望の有無」に関して 5%信頼区間において有意差が発見された。これらを踏まえ、本調査に向けて仮説の修正を行った。その結果、以下の推測を得た。

(1) 幸福度と関係性の量的相対基準について
活動時間数で観察できるのではないか？

(2) 夢・希望の有無について
夢・希望の項目において自己実現的な希望を抱いている被験者よりも他者への貢献を抱いている方が、幸福度が高くなる傾向にあった。ゆえに項目を「やりがいの有無」「目標の有無」の二つに分けた場合、幸福度との相関の違いが観察できるのではないか？

(3) 「幸福」という言葉のバイアス調査項目について
「幸福」と「不幸」によるバイアスは発見されなかったが、「生活満足度」「生活充実度」という項目にした場合、違いが生じるのではないか？

6. 本アンケート調査

上記の推測を踏まえ、質問項目を作成し、第3フェーズとして20代から60代の男女1,075名（各年代毎に男女別約100名ずつ）を対象に図5の質問項目で本アンケート調査をインターネットで行った。

関係性に関する量的相対関係については「家族」「同僚」「友人」「サークル」「ネット上のコミュニティ」「ご近所づきあい」の6項目について、その活動時間数を自己申告制で回答してもらった。この結果に基づき、判別分析によりその影響度を解析したところ、正準判別係数において「家族との時間数」の第一関数が0.679と高く、次いで「ネット上のコミュニティとの時間数」「友人との時間数」が-0.456、0.433であった。ただし、第一関数の正準相関が0.325と低いため、上記三項目はそれなりに幸福度に対して影響性がみられるが、さほど大きな影響力はないものと推測される。

また、「生活満足度」「生活充実度」という言葉による幸福度とのバイアスについては、それぞれにおいて相関分析を行った結果、極めて高い相関係数が得られ、言葉を変更してもさほど変化はないと推測された。

一方、「やりがいの有無」「目標の有無」においてはノンパラメトリック検定を行ったところ 1% 信頼区間において有意差が発見され、夢・希望よりもさらにその差が顕著に表れた。また、両者の比較においては、やりがいについては有の平均幸福値が 7.00、無が 5.756 であるのに対し、目標について

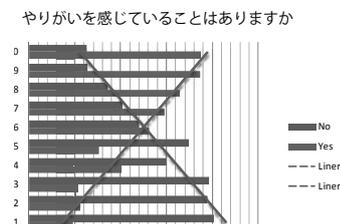
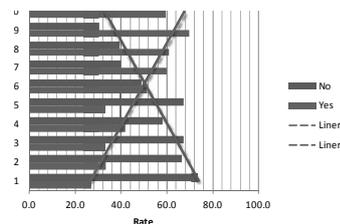


図2) 上段：目標の有無と幸福度
下段：やりがいの有無と幸福度

は有の平均幸福値が 6.83、無が 5.97 と、平均値比較においても「やりがいの有無」が幸福度に対し寄与する割合が高いことが推測される（図2）。

7. 結論

以上の結果から、当初仮説であったコミュニティ活動量と幸福度との相関性に関しては「家族と一緒に活動する時間数」が最も寄与しやすいことが分かった。ただ、これらについてはその影響度は全体に対してあまり大きくなく、あくまで「多少なりにその傾向にある」という程度であるといえる。

一方、「やりがいの有無」「目標の有無」といった項目については幸福度との相関が高いことが推測され、特に「やりがいの有無」は中でも最も影響度があると推測されることが分かった。ただし、今回の研究においては各幸福度（10段階）における被験者数のばらつきが大きく、統計データとしての信憑性についてはやや疑問の残るところであり、今後これらを考慮した調査が必要であると考えられる。

参考文献

- *1 Richard A. Easterlin, M. A. (1974) Does Economic Growth Improve the Human lot? Some Empirical Evidence, in P.A. Davis & W.R Melvin, eds., Nations and Households in Economic Growth, Stanford University Press, pp. 98-125.
- *2 内閣府、2011、幸福度に関する研究会報告—幸福度指標 試案一、<http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/koufukudo.html>
- *3 ジョセフ・E・スティグリッツ、アマティア・セン、ジャンポール・フィトゥシ、2012、暮らしの質を測る—経済成長率を超える幸福度指標の提案、金融財政事情研究会
- *4 Frans de Waal (2010) The Age of Empathy: Nature's Lessons for a Kinder Society, Three Rivers Press